

令和七年

天孫神社例祭

国指定重要無形民俗文化財

大津祭

おお

まつり



10月11日 土 宵宮
10月12日 日 本祭

宵宮 夕刻～21:00 本祭 9:00～17:30

10月5日(日) ※山建て8:30～15:00

※滋賀県、大津市の補助金の交付を受けています

特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟

☎077-525-0505 <http://www.otsu-matsuri.jp/> 大津祭 検索

協賛：叶匠壽庵 森井眼科医院 滋賀銀行



施設案内

大津祭を知るテーマ館
大津祭曳山展示館
☎077-521-1013

住所 大津市中央一丁目2-27 (丸屋町アーケード内)
開館時間 9:00～18:00(最終入場17:30)
入館料 大人(中学生以上) 150円 / 小学生 70円
※団体(15人以上)割引あり / 小学生未満は無料
休館日 月曜(祝日の場合翌日)、年末年始

四百年の歴史と伝統を持つ大津祭は、湖国三大祭の一つで、国指定重要無形民俗文化財に指定されています。曳山巡行は絢爛豪華な13基の曳山が、優雅なお囃子を奏でながら、からくり人形を操り、まちなかを巡行することで知られています。大津祭の曳山の起源は、現存する古文書「四宮祭礼牽山永代記」「牽山由来覚書」などから、まず寛永12年(1635)に西行桜狸山が、その後、安永5年(1776)までの約140年間に14基の曳山が創建されたことがわかっています。祭礼は、かつて毎年10月10日が本祭でしたが、現在は毎年10月の「スポーツの日」の前日が本祭、その前日が宵宮となっています。

關取り式

毎年九月十六日には天孫神社において關取り式が行われます。關取らずで毎年先頭に行く西行桜狸山を除く十二基が、最初に舞殿で本關を引く順番を決めるための座關を前年の巡行順に引き、その後本殿に移動して本關を引き巡行順が決まります。關取り式の前には神輿祓い神事が行われ、この日から大津祭の祭礼期間となり、夜にはお囃子の稽古も始まります。



山建て

本祭の一週間前の日曜日に各山町において一斉に山建てが行われます。作業は早朝から始まり、組み立ては町内が契約した山方と呼ばれる人たちの手により、釘を使わず縄と栓のみで約半日で組み上げられます。

午後からは組み上がりを確認するための、曳初め(ひきぞめ)と称する試し曳きが行われ、一般の人が曳き手として参加することもできます。



宵宮

宵宮は本祭の前日に行われる行事です。午後から各山町の周辺を曳き回す宵宮曳きが行われたあと、曳山は町内に留め置かれて大吊り提灯などの飾り付けが施され、夕刻から曳山の上でお囃子が奏でられます。また、からくり人形や本祭用の懸装品(幕や鍔金物)が公開され、間近で観ることができ、町中は夜の九時過ぎまで多くの人で賑わいます。



所望

からくりを演じることを所望といい、地元では「しょうもん」と発音します。大津祭のからくりは、中部地方の仕掛けや技を見せることを中心にしたものとは違い、能楽や中国の故事などの、物語の一節を切り取って見せるという、他にはない特徴があります。巡行中約25ヶ所で所望が行われますが、その場所には先を赤く染めた御幣が掲げられ、見物に訪れた人にもすぐわかるようになっています。



本祭

天孫神社の南側に集合した曳山は、九時二十五分に關取らずの西行桜狸山を先頭に巡行を開始します。まず天孫神社の正面鳥居前で止まり、關改めのあと最初の所望が奉納されます。午前中はこうした神事があるため囃子方は紋付きを着用しますが、昼休憩をはさんだ午後からは着流しと呼ばれる色とりどりの襦袢半纏姿となり、一段と華やかになります。巡行は夕方の五時半まで市内の氏子中を回り、町は終日お祭り一色の賑わいに包まれます。



厄除け粽

蘇民将来伝説に因む京都祇園祭の風習を取り入れたもので、この粽を門口に飾っておくと厄がその家に入ってこないと言われています。曳山の上からは囃子方がそれぞれ自らが購入した厄除け粽を盛大に撒き、御利益を授かるうと、それを受けるのも大津祭の楽しみのひとつとなっています。(※中に餅は入っていません)



神田浩山 書の研究会

浩玄會

毎日書道会評議員・日本詩文書作家協会理事
公益社団法人滋賀県書道協会理事長

大津祭曳山展示館3階にて 水・金・土 開講

くわしくは
こちら



コミュニティ・バンク京信



大津支店 TEL(077)522-1221

「コミュニティ・バンク京信」は京都信用金庫のブランドネームです

医療法人社団 新緑会



森井眼科医院

つながりの数だけ、人は強くなれる。

第一生命保険株式会社 滋賀支社

TEL 077-522-2644
受付時間 平日9時~17時

叶

匠

壽

庵



代表銘菓

京都駅から2駅10分。
ようこそ、びわ湖の特等席へ



▲詳細はこちら

びわ湖大津プリンスホテル 大津市におの浜4-7-7
TEL:077-521-1111

さいざようざくらたぬきやま
西行桜狸山
關取らず 銀冶屋町



寛永十二年（一六三五）

塩売治兵衛が狸面を被って踊った事が発祥となった。大津祭最初の曳山。明暦二年に西行法師が桜の精と問答を交わす力ラクリを採り入れ、西行桜狸山となった。曳山の祖となった狸は屋上に載せられ、祭の先導をす

しょうじょうやま
猩々山
南保町



寛永十四年（一六三七）

能案の「猩々」から取材したもの。むかし唐の国の楊子の里に住む高風という親孝行の者がいた。ある夜夢に「楊子の町に出て酒を売れ」と教えられ、売っていると、海中に住む猩々から、酌めども尽きず、飲めども味の変らない酒の壺を与えられたという。所望は高風が酌をし、猩々が大盃で酒を飲み干すと、たちまち顔が赤く変わる。

せいおうぼざん
西王母山
九屋町



明暦二年（一六五六）

謡曲の「東方朔」から取材したもの。むかし崑崙山に住む西王母が天女とともに舞い降り、帝に桃の実を捧げ、長寿を祝した。この桃は三千年に一度花が咲き、一個しか実らない貴い桃であった。ここから俗に「桃山」と呼ばれる。所望は、桃が二つに割れ、その中から童子が現れて所作をする。これは桃太郎説話が加味されたものとも云われる。

にしのみやえびすやま
西宮蛭子山
白玉町



万治元年（一六五八）

町内の伝承では、古くから西宮の蛭子を祀っていたが、後に曳山に載せるようになり、鯛を釣りあげた蛭子に商売繁昌の祈りを込めるようになったとある。所望はえびすさんが鯛を釣り上げる所作で人気がある。この所作から俗に「鯛釣山」と呼ばれている。創建当初は宇治橋姫山と称していたが、延宝三年以後、いまの西宮蛭子山となった。

せつしょうせきざん
殺生石山
柳町



寛文二年（一六六二）以前

能案の「殺生石」から取材したもの。鳥羽院に寵愛された玉藻前は、実は金毛九尾の狐で帝の生命を奪おうとしていたのを安部泰親に見破られ、東国に逃れ、那須の殺生石となって旅人を悩ましていたが、玄翁和尚の法力によって成仏したという。所望は玄翁和尚の法力によって石が二つに割れ、女官姿の玉藻前が現れ、その顔が狐になる。

ゆたてやま
湯立山
玉屋町



年未詳（寛文年中湯立山）

天孫神社の湯立ての神事はこの山から捧げるとい、曳山は天孫神社を型どり、周りはその廻廊を真似たものである。所望は禰宜がお祓いをして、市殿が笹で湯を奉り、飛矢が神楽を奏する。昔からこの湯をかけたれたものは五穀豊穡、病氣平癒、商売繁盛など縁起がよいとい。創建当初は孟宗山といっていたが寛文年間、いまの湯立山となった。

かつきよやま
郭巨山
後在家町 下小唐崎町



元禄六年（一六九三）

郭巨は中国二十四孝の一人。家は貧しく、子供が生まれて老母は自分の食を減らして孫に与えねばならなかった。子供は又得られぬが母は再び得ることはできない」と、郭巨は妻と相談し、子供を土中に埋めようとして穴を掘ったところ、そこから黄金の釜が出てきたという故事による。所望は、郭巨が鍬で土を掘ると黄金の釜が出てくる。

こうめいきすいざん
孔明祈水山
中堀町



元禄七年（一六九四）

蜀の諸葛孔明が魏の曹操と戦ったとき、流れる水を見て「敵の大軍を押し流して下さい」と水神に祈り大勝をした故事によるが、古い資料には、水に渴した孔明が趙雲に命じ、土を掘らせたら泉が湧いた、ともある。所望は、孔明の前に立つ趙雲が鉞で岩を突くと、こんこんと水が湧き出し、それを見た孔明が羽扇をうち振り喜ぶ様をあらわす。

しゃつきょうざん
石橋山
湊町



宝永二年（一七〇五）

謡曲の「石橋」に取材したもので、大津定基入道寂昭が宋の国に渡り、清涼山にある文殊菩薩の浄土に続く険しい石の橋を渡るうとしたとき、文殊菩薩の使いである獅子が岩の中から現れて、牡丹の花に舞い戯れるのを見たというもの。所望は、岩が開き、僧寂昭の前に唐獅子が歩み出てきて牡丹の花に戯れ遊んだあと、岩の中に戻ってゆく。

りゅうもんたきやま
龍門滝山
太間町



享保二年（一七一七）

黄河の上流の龍門山の滝。魚は登ることができないが、もし登る魚があれば、昇天して龍になるという故事に因んでいる。登龍門という語はここから出たもの。所望は龍門の滝を鯉が躍り上がる所を見せる。鯉の滝登りは曳山のからくりとして他に例がなく、たいへん貴重なもの。見送りはベルギーのタペストリーで重要な文化財に指定されている。

げんじやま
源氏山
中京町



享保三年（一七一八）

紫式部の「源氏物語」をテーマにしたもの。大津祭の曳山の中で、唯一大津に由来した力ラクリを採り入れたものである。紫式部人形の十二単や曳山を飾る部品、欄干を見ると平安の昔を偲ばせるつくりで、女性的なデザインである。曳山に乗る緑色の岩は石山寺の観月台を模し、所望は紫式部が月を見ながら構想を練る様子を表現している。

じんぐうこうこうやま
神功皇后山
狛師町



寛延二年（一七四九）

神功皇后が戦さに先立ち、鮎を釣り戦勝を占ったとされる伝説に因む。神功皇后は当時懐妊されていたが、戦さが終わった後、応神天皇を無事出産されたことから「安産の山」として信仰されている。所望は、皇后が岩に弓で字を書く所作をする、岩に次々と文字が現れてくるからくりで、文字書きからくりとしては漸新な機構とされている。

げつきゅうでんざん
月宮殿山
上京町



安永五年（一七七八）

謡曲の「喜多流月宮殿」から取材したもの。唐の皇帝が長生殿で新年を祝う節会を催され、世を寿がれたというもの。所望は、鶴と亀の冠をつけた男女の舞人が、皇帝の前で舞を舞う。そこから俗に鶴亀山とも呼ばれる。ベルギー製で重要な文化財の見送り幕を所有するが、現在は平成十一年十月に復元新調されたものを使用している。

かぐらやま
神楽山
宵宮飾り 堅田町



寛永十四年（一六三七）

三輪明神を祀っていたことから、創建当初三輪山と称していたが、享保九年に改造され神楽山となった。安政六年を最後に巡行しなくなり、現在は三輪明神・市殿・禰宜・飛屋の四体の人形と、中国清代初期の官服を仕立てた見送幕、前懸幕の「振割図刺繍」、胴懸幕の「耕織図刺繍」が宵宮と本祭の両日、堅田町内に飾られる。

ほてい
布袋ねりもの
宵宮飾り 新町



元禄六年（一六九三）以前

ねりものとは今でいう仮装行列で、江戸時代の大津祭には、多くの氏子町からねりものが出されていた。新町の布袋は、元禄六年の記録に登場することから、それ以前の創建であることがわかる。現在、宵宮と本祭に町内で飾られる布袋の人形は、文化七年に新調されたもの。全高二メートルを超え、かつては人が中に入って練り歩いた。

みこし
神輿
下百石町



寛政九年（一七九七）以前

寛政九年の伊勢参宮名所図会に「御輿祓いの日に百石町より紙の御輿を出す」とある。この頃の神輿は、フスマのような紙貼りの神輿であった。弘化二年に神輿の新調があったという記録があり、現在の神輿の鳳凰や璽珠は、この時のものである。昭和三十年代までは、天孫神社の神輿とともに渡っており、国指定を機に渡御が復活した。

大津祭見て歩きマップ

